文化の交差点

bunka to bunka no kousaten

2018年 初夏号

contents...

サークル見聞録

演劇研究会　　p 1

マンドリン楽部　　p 2

文化の案内板

劇団木霊　演劇研究会　　p 3

交響楽団　ギタークラブ　　p 4

Essay　　p 5

「文化の交差点」2018年初夏号

発行日:５月２２日

発行者:「文化の交差点」編集委員会

代表・中澤（社学４年）

連絡先:090-2331-4456

サークル見聞録

劇評
演劇研究会　露と枕旗揚げ試演会
桎梏ブランコ
（4月19～23日　＠大隈講堂裏劇研アトリエ）

前々から旗揚げを心待ちにしていた「露と枕」の最新作。舞台は、とある高校の旧校舎図書室。取り壊しに反対して署名活動をしている文芸部のなかで、過去に起きた部員の〝自殺〟の真相をめぐり、〝犯人〟探しが始まる。そのなかで徐々に暴かれる、部員たちの抱えていた秘密の数々。登場人物一人一人の心の薄皮を一枚一枚はがしていくような緻密なストーリー展開に脱帽。

一番、心に残ったのは、主人公の男性部員の心の闇。彼は、自殺した女性部員の相談に乗っているうちに、彼女の悩み、苦しみを聞くこと自体に快感を覚え、ついには自らの手で彼女を殺めたい欲望に駆られる。いわゆる〝いいひと〟として現象している彼の内面に湧き起こる昏い愉しみ。この劇は、誰しも心に秘めている闇の深淵を覗き込ませる力を持っている。

本公演をもってついに正式に旗揚げした「露と枕」。学生離れしたストーリーテラーの才能を感じさせる本劇団の今後に大いに期待している。

（国際問題研究会・閃）

早稲田大学マンドリン楽部
第200回記念定期演奏会 を聴いて

（5月19日　@浅草公会堂）

創立から105年の歴史を持つマンドリン楽部さんの定期演奏会は、なんと今回で200回目。伝統を受け継ぎ「いま」に全力を注ぐみなさんの演奏を聴いて、私はとても胸が熱くなりました。

圧巻だったのは、「Ⅱ部」で演奏された、現役生とOB・OG合同のドヴォルザーク「交響曲第9番『新世界より』」。ステージを約130人の奏者が埋め尽くし、あの美しくもエネルギッシュな第1楽章の旋律が満員の会場に響きわたる。マンドリンなどから出る高音とギターやマンドロンチェロなどからの低音とのかけあい。そこにフルートやオーボエなどの音色も合わさる。全楽章を通じて迫力満点かつリズミカルな演奏だった。

「Ⅰ部」は現役生による演奏。どの曲も特徴的で、マンドリンの音色を基調にいきいきと表現されていた。たとえば「トランペット吹きの休日」は何かズンズン、と前に進んでいけそうな曲。「星条旗よ永遠なれ」は金管楽器や鉄琴の音色が冴えていた。そして「サウンド・オブ・ミュージックメドレー」では、小さい頃よく聴いていた曲が演奏されて「あっ、あの曲かー」と懐かしい気持ちになった。これからも素晴らしい演奏を楽しみにしています。

（豹）

文化の案内板

演劇

2018年劇団木霊本公演
違う星

日程　5月25日(金)～28日(月)
25日（金）19：00～
26日（土）14：00～/19：00～
27日（日）14：00～/19：00～
28日（月）19：00～
※受付開始は開演の45分前、開場は開演の30分前を予定しております。

会場　大隈講堂裏劇団木霊アトリエ

【作・演出】水無月光梨
【出演】奥手前、木村のばら、小池彩水、高嶋友行、渡辺大成
【前売/当日】フリーカンパ制
【ご予約】https://ticket.corich.jp/apply/91166/
※数に限りがございますのでお早めにお申込みください。
【お問い合わせ】
kodama.2018.hon@gmail.com　080-1631-5838(制作)　@chigau_hoshi　@gekidankodama

「家族」だから、「友達」だから、
「恋人」だから、なに？

わたしは、あなたは、
エスパーではないのだから
言わなければ聞かなければ
見つめなければ　会わなければ、
何もわからない。

わからないということも、
わからなくていいということさえも。

まずは座って、食事にしましょう。

演劇

演劇研究会　ボクナリ #1
「目醒め」

6/7tue～11mon
7日（木）19：00
8日（金）19：00
9日（土）14：30　19：00
10日（日）14：30　19：00
11日（月）19：00

会場　大隈講堂裏劇研アトリエ

【作・演出】榎本純
【出演】武田迅人、甲野萌絵、藤岡皇佑、大下沙綾、佐藤沙千帆、榎本純（以上、ボクナリ）
内ヶ崎敬明（天ノ川最前線）、倉光亮輔、千田周平（FREEDOM Sphere）、玉谷義樹
【お問い合わせ】gekidanbokunari@gmail.com

初夏。

僕達は、大学卒業を前に自主映画を撮ると宣言。
友人達から融資を募っていた。
ところが、実際は撮影なんてしていなかった。
周囲の期待だけが膨らみ、次第に追い込まれていく。
焦った僕達は、その場で自分たちのドキュメンタリー映画を撮り始める。

始まりから終わり。そして、今までの事。
現実から逃避する中で揺さぶられながらも、撮影は平然と進む。

だが、本当の問題はそこではなかった———。

音楽

早稲田大学交響楽団 春季演奏会

■日時：2018年5月24日（木）　18:30開場　19:00開演
■場所：新宿文化センター　大ホール
（JR線・京王線・小田急線「新宿駅」東口より徒歩15分／西武新宿線「西武新宿駅」より徒歩15分
都営大江戸線・東京メトロ副都心線「東新宿駅」A3出口より徒歩7分／都営新宿線「新宿三丁目駅」C7出口より徒歩10分
東京メトロ丸ノ内線・副都心線「新宿三丁目駅」E1出口より徒歩7分・B3出口より徒歩11分）

■プログラム

ベートーヴェン／**交響曲第2番** ニ長調　作品36
メンデルスゾーン／演奏会用序曲「**フィンガルの洞窟**」作品26
ブラームス／**悲劇的序曲**　作品81
ヴェルディ／歌劇「**シチリア島の夕べの祈り**」より序曲　作品20
ベルリオーズ／劇的物語『**ファウストの劫罰**』より「**ラコッツィ行進曲**」作品24
チャイコフスキー／スラヴ行進曲　作品31
ヴェルディ／「**アイーダ**」より**凱旋行進曲**　作品26

指揮：田中　雅彦（当楽団永久名誉顧問）

■チケット料金（全席指定）：　S席2,500円　A席2,000円　B席1,500円

チケット取り扱い

早稲田大学交響楽団事務所
Tel. 03-3204-3585　Fax. 03-5539-4334　E-mail office@wso-tokyo.jp
受付時間：10:30～17:00（日曜・祝日を除く）

早稲田大学交響楽団チケットウェブ
http://ticket.wso-tokyo.jp/

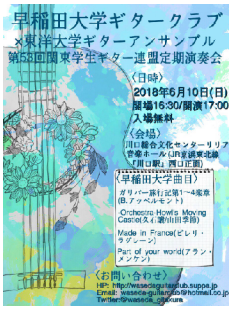
音楽

早稲田大学ギタークラブ ×東洋大学ギターアンサンブル 第53回関東学生ギター連盟定期演奏会

■日時：2018年6月10日（日）　開場16:30　開演17:00
■場所：川口総合文化センター　リリア音楽ホール
※会場までのアクセス…JR京浜東北線川口駅西口正面
（川口リリア音楽ホールHPよりアクセス詳細　https://www.lilia.or.jp/access）

■プログラム（早稲田大学ギタークラブのステージ）

・ガリバー旅行記第1～4楽章（B. アッペルモント）
・Orchestra-Howl's Moving Castel（久石譲／山田季節）
・Made in France（ビレリ・ラグレーン）
・Part of your world（アラン・メンケン）



入場無料！　※今年度は東洋大学との合同演奏会となります。

皆様お誘い合わせの上、是非お越しください。部員一同、皆様のご来場を心よりお待ちしております。

■お問い合わせ
HP : http://wasedaguitarclub.suppa.jp/
Mail : waseda-guitarclub@hotmail.co.jp
Facebook : https://www.facebook.com/waders.guitarclub
Twitter : @waseda_gitakura

屋根より高い

５月の連休に「第五福竜丸」の展示館に行った際、入り口に鯉のぼりが二匹泳いでいた。よく見ると家庭で飾るものと少々風貌が違う。赤、緑、青、黒の太く勢いのある線が鯉の胴体を彩り、大きな黒い瞳を見開いている。岡本太郎が描いた「太郎鯉のぼり」だ。

鯉のそばに画家の言葉が小さく貼りだされてあり、そこには画家独特の語り口で鯉のぼり頌がつづられていた。昔の日本の人々というのは鯉をこんなに大きくして田んぼの上の空に泳がせようと考えた、おおらかで大したことを考えたものだ、鯉のぼりはまぎれもなく人々のものなんだなあ、というような内容のものだったと思う。鯉のぼりから日本の市井に生きる人々の発想力や創造力を感じた画家は、自らもまた鯉を描いてみせた。

権威やステレオタイプを嫌い、常識や教養の先入観から芸術をながめまわすことしかできなくなっている現代人を挑発し続けた画家は、芸術は特別なものであってはならないこと、自分が創りだす・自分自身を創る行為であるべきことを力説している。「失われた人間の全体性を奪回しようという情熱の噴出といっていいでしょう。現代の人間の不幸、空虚、疎外、全てのマイナスが、このポイントにおいて逆にエネルギーとなってふきだすのです。…」。人間の内側から湧いてくる、純粋で猛烈な営みを鯉のぼりを眺めながらとらえた画家の息づかい。

鯉のぼりが飾られていたのはむろん端午の節句に合わせてだが、「太郎鯉のぼり」だったのは、核爆弾が人間の頭上で炸裂させられた世界を幾度も描き、見るものに問うた画家のものだったからだろう。1954 年、アメリカのビキニ環礁での水爆実験によって日本の漁船「第五福竜丸」と乗組員が「死の灰」を浴び被爆した。それから 64 年。いまもなお世界に横たわる大いなる矛盾を、鯉のぼりの、まるで画家のギョロとした眼のようなおおきな瞳が見つめているようにも感じた。

（国際問題研究会会員）